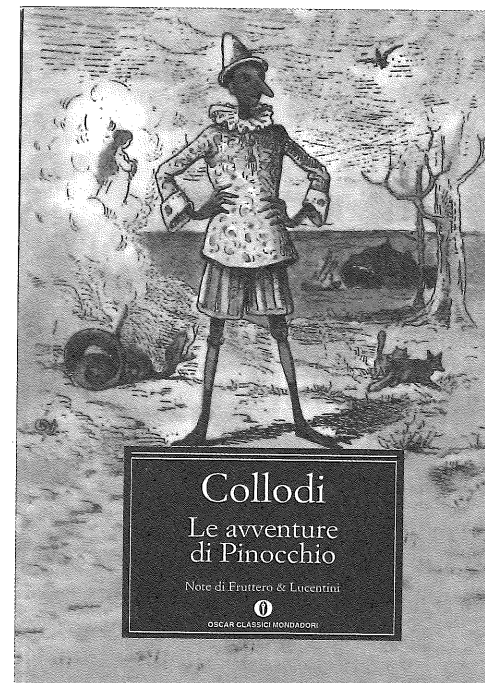


1) ピノッキオという物語の成立

C. コッローディ作の『ピノッキオのぼうけん』(1883年)という物語の心臓部には、ある屈折が打ち込まれている。〈図1〉

この物語の原形は、1881年7月7日から10月27日まで、“Giornale per i Bambini”という子ども向けの雑誌に「あやつり人形のおはなし」というタイトルで連載されたテキストである。しかし、このときは、現在われわれが見ることができる完成形の第15章まででストーリーは終わっていた。す



〈図1〉

なわち、“こうしてピノッキオは、ならず者たちによって大きなカシの木の枝にしばり首にされ、ぶらぶら揺れていましたとき。悪い子は結局こうなるんだよ。はいおしまい”というような救いのないエンディングだったのである。

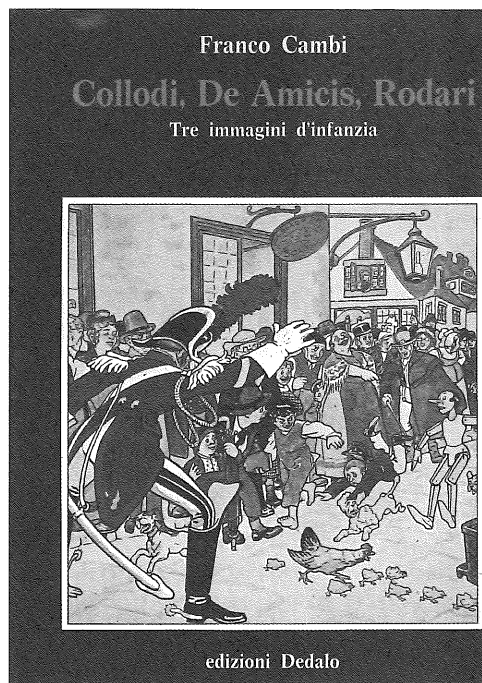
ところが、よく知られているように、この連載完結に対しては「これじゃあんまりだ」という「読者」、すなわち子どもたちの声が編集部に多数寄せられる。この「読者」からの要望に応じて、翌1882年2月16日に連載が再開され、いったんは確かに死んだはずのピノッキオは青い髪の少女によって救い出され、やがて話は単なる説教臭い子どもだましの話から全く別の次元へと展開し、思わぬ成長を遂げていく。ピノッキオの真の意味での冒険は、この連載再開の時点から始まったのだ。1883年1月25日に連載は完結、同年のうちに、“Le avventure di Pinocchio (ピノッキオのぼうけん)”の単行本が刊行されたのであった。

この断絶と溶接の経緯は何を示しているのだろうか。ピノッキオという物語が、正しく著者と読者の合作だったということの意味しているに違いない。この作品は、ひとりコッローディだけの手によるものでは、もはやない。社会とは無縁な虚空に浮遊するおとぎ話ではない。新生イタリア王国はトスカーナ地方の、ひとつひとつは小さな、

しかし未来を担うべき切実な声たちの圧倒的な抗議に呼応するようにして復活し、急ごしらえの統一国家において混乱を極める人々の生活的現実と深く切り結びながら「ぼうけん」を重ね、凶らずも新たな物語を紡ぎ出していった作品なのである。このとき、物語は、半島社会全体にとっての新たな連帯の可能性を示したと言えるだろう。

2) ピノッキオに見られる法イメージ

そのような物語を読み解くひとつのカギが、法イメージである。物語の冒頭、ジェッペットじいさんの家から脱兎のごとく逃走するピノッキオの前に立ちはだかる警官。〈図2〉それは、逸脱を取締まる物理的暴力装置が肉体化した存在である。人々にとって、新しい統一国家は、イタリア人たちの市民としての統一、その公共性を担保するものではなく、むしろ端的に銃剣だった。しかも、その警官は、ピノッキオを捕縛し

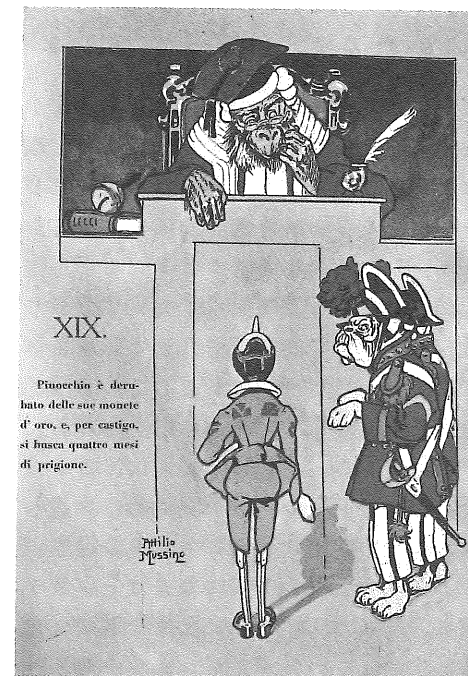


〈図2〉

たすぐ後で、“世間の声 (la voce pubblica)” にやすやすと押されて今度はジェッペットじいさんを逮捕し投獄する。国家は、統治の基盤も技術もなく、ただいたずらに統制的権力をふるう、恐るべき銃剣だったのだ。このような世の中は、ハムレットが見ていた「関節が外れた」社会と同じ性質をもつ。人々は、ここでいったい何を頼ればいいというのだろう。

あるいは、物語の後半、子ども同士のけんかを見咎めて介入し、ピノッキオを連行する二人の警官。黒い制服を着た大男たちだ。子どもから見れば巨大な、悪寒を覚えるような存在であろう。彼らもまた、ろくろくピノッキオの話も聞かず、力づくで事態の收拾に当たる。力の差がありすぎて、抵抗してもムダだ。ピノッキオは首根っこをつかまれ、ネコのようにぶらさげられて、どこかへと連れ去られる。残るのは絶望的な無力感であり、遵法精神よりは、むしろ法律と権力に対する不信と不敬である。およそ、コッローディ=ピノッキオに、権威というものに対するポジティブなイメージは一切ない。当局ないし権威の一切が、容赦ない批判にさらされている。この点が、デ・アミーチスの『クオレ』とは異なる。ここでの連帯の相手は、権威ではないのだ。

そして、極めつけのカリカチュアは、言うまでもなくゴリラの裁判官であろう。〈図3〉これほど見事な“イタリア法”の表象はない。一見すると権威と理性を備えた有り難いものようであるが、虚勢の化けの皮を剥がすと、そこには全くのナンセンスしか見出せない。1000年以上にわたって思い思いの文化を構築してきたイタリア半島社会の各地方に、無理無理画一的に適用される統一国家法など、少なくとも、人々の生活感覚からは遠く隔たった、滑稽な存在でしかあるまい。



〈図3〉

本来、作者コッローディが熱心な国家統一論者であり、その方面の論説が多数残っていることも良く知られている。しかし、1880年代前半、すでに期待は幻滅へと変わっていたに違いない。では、作者は、ピノッキオをならず者たちによる「死刑」から救出したのち、いったいどこへ連れて行こうとしているのであろうか。ただ単純に身体の欲求に正直に生きようとしているだけのピノッキオの生きる道は、「関節が外れた」この世のどこにあるのだろうか。

読者=子どもは、知らず知らずのうちに、自己の身体をピノッキオにシンクロナイズさせ、ピノッキオの身体をリアルに生きる。ピノッキオの喜びを喜び、ピノッキオの苦しみを苦しみ、ピノッキオの絶望を絶望する。

3) 受刑者劇団のピノッキオ

閑話休題。私は、ピノッキオが書かれたのと同じトスカーナ州の、ヴォルテッラという山岳都市で、受刑者劇団“Compania della Fortezza” (Fortezzaとはヴォルテッラ刑務所のこと) が演じた「ピノッキオ」を観たことがある。しかも、その刑務所の内部で。

この劇団は、ヴォルテッラ刑務所に服役している受刑者たちによって構成されている。指導者は外部から入っているが、舞台上演するのは国籍も人種もさまざまな男性受刑者たちである。ヴォルテッラでは、毎年夏に演劇祭が開かれるが、この劇団も毎年参加しており、刑務所内部の中庭や、ときには塀の外に出てヴォルテッラの市民ホールでも上演する。人気劇団なのだ。それどころか、全国各地からの熱いリクエストに応じて、年中上演ツアーまでしている(ついに2009年、「国外」ツアーも実現した。といっても四方をイタリア共和国に囲まれたサン・マリノ共和国である)。

私は、2008年7月27日に、ヴォルテッラ刑務所内で上演された“Pinocchio --- Lo spettacolo della ragione” を実見する機会を得た。満員の観客の前で繰り広げられたピノッキオは、100%の前衛演劇だった。〈図4〉何をやっているのか何を叫んでいるのか全く分からない。ナンセンスもいいところだ。しかし、受刑者俳優たちは恐るべき集中力を発揮して演技しているように見えた。ピノッキオは、何といっても非行少年のチャンピオンである。ストーリーの中には「ろうや」に放り込まれるシーンもある。裏切りもある。絶望もある。悔悟もある。そのようなストーリーを演じさせるとしたら、ほかの誰よりもまず、ぎりぎりの生を生きてきた受刑者たちのリアルな身体こそが最適なのだ、と指導役のA. プンツォ

(ナポリ出身の職業的演劇家)は言う。更生に役立つかどうかなどどうでもいい。受刑者にとって演劇が必要なのではなく、演劇にとって受刑者が必要なのである。観衆は、ピノッキオの受苦を、受刑者の身体を介してこそ良く感受できるのだ。子どもたちは、ゴリラの裁判官とはなく、刑務所の一隅とのあいだにこそ連帯を求める。

ピノッキオの身体をリアルに生きること。それは本当は、規律化され馴致されたすべての身体(大人たち)にとっての生きられた課題でもある。

4)「繰り返される過ち」の物語

言うまでもなく、ピノッキオの「ぼうけん」とは、繰り返される過ちである。その根源は、ピノッキオの身体を貫く生の欲求にある。何度誓いを立てても、ピノッキオの身体は倫理を裏切る。のちに改悔がくる。新たな約束。そして、再び過ち。その繰り返



<図4>

返し、それがピノッキオにおける人生の「ぼうけん」だ。

そして、正直な欲求を生きようとするがために、かえってピノッキオはウソを重ねる。ウソをつくたびに伸びる鼻という、ピノッキオという物語を世界的に象徴するシーンは、元来イタリア語の言い回しから推測される地方的な民俗伝承に由来するようであるが、ここでは倫理と欲求の矛盾を鮮やかに身体化したイメージとして、普遍的な意味をも獲得しているように思われる。

いずれにせよ、読者=子どもは、ピノッキオの転落と上昇の経験を身体的に共有し、自らの身体を転落させ上昇させる。遍歴、邂逅、庇護、救済という筋書きは、ダンテ『神曲』以来の、イタリア文学の伝統に忠実にしたがっている。また、過ち、許し、再生という基本的枠組は、史上初めて死刑廃止を明確に唱えたC.ベッカリーア『犯罪と刑罰』(初版1764年、リヴォルノ)の核心的主張でもある。けれどピノッキオの物語に、少年法の精神を見ようとする論者がいるのも、もちろん偶然ではない。しかし、少年法の精神は、実は、大人の受刑者たちの人生とも無縁ではないのだ。もしも人間が、身体に正直に生きようとするればするほど、それだけ本質的に誤りと過ちから自由ではない存在だとすれば。ここでの法の本質は、他者の赦しによる人間の成熟という点に存する。人間は、ルールに従順な被造物ではなく、関係に生きる身体なのだ。

死刑を廃止したイタリア王国統一刑法典の制定(1889年)などといった表面的レベルの問題だけではない。肝腎なのは、法律という氷山の一角を水面下で支える巨大な文化としてのイタリア法の生成過程である。それは、いまだに完結を見ていない未完のプロジェクト、永遠のプロセスとしての“法”なのである。

5)「人間の子ども」になるということ

物語の終盤、ピノッキオの夢のなかに出てくる仙女の言葉は以下のようなものである。

「あなたの優しい心(buon cuore)に感謝して、今日まであなたがしてきたよくないことは、すべて許します。両親が困っていたり病気のときに優しく(amorosamente)一緒にいてあげることができる子どもは、いつでもほめられ、そして愛される値打ちがある子どもなのよ。たとえば、よく言うことをきく子だとか、お行儀が良い子だとか、いって優等生扱いされることなどなくともね」

目を覚ましたピノッキオは、いつの間にか「人間の子ども」になっている。

「人間の子ども」になる条件は、法律や権威に盲従することではない。約束厳守でもウソをつかないことでもない。それは身体に正直に生き、過ちを繰り返しながら、身をもって愛(amore)を知ることにある。

それは、無名の子どもたちから発せられた無数の声が、まだはっきりとした形をなしていない“イタリア法文化”を、力強く方向付けた一瞬である。

Bibliografia

C.Collodi, *Le avventure di Pinocchio: storia di un burattino*, note di C.Fruttero e F.Lucentini, Oscar Mondadori, 1981
安藤美紀夫訳・臼井都画『ピノッキオのぼうけん』福音館古典童話シリーズ3、1970年

G.Biffi, *Contro maestro Ciliegia: commento teologico a "Le avventure di Pinocchio"*, Jaca Book, 1977, pp.214; Mondadori, 1998, pp.238

G.Biffi, *Pinocchio e la questione italiana*, Piemme, 1990, pp.26

F.Cambi, *Collodi, De Amicis, Rodari: tre immagini d'infanzia*, Dedalo, 1985

MA.Cattaneo, *Suggerimenti penalistiche in testi letterari*, Giuffrè, 1992, pp.366

F.Cosentino, *Pinocchio, letteratura e diritto*, in *Critica del diritto*, 2000-n.1

G.Cusatelli, a cura di, *Pinocchio esportazione: il burattino di Collodi nella critica straniera*, Armando Editore, 2002

V.Frosini, *La filosofia politica di Pinocchio*, Edizioni Lavoro, Roma, 1990, pp.77

V.Frosini, *L'interpretazione politica di Pinocchio*, in *Memorie e rendiconti*, Serie III-vol.X, 1990

A.Gnocchi e M.Palmaro, *Ipotesi su Pinocchio*, Ancora, 2001

L.Incisa di Camerana, *Pinocchio, il Mulino(L'identità italiana)*, 2004

G.Iltzovich, *Pinocchio e il diritto*, in *Materiali per una storia della cultura giuridica*, 2007-n.1

A.L. & C.M.P., *Da "Le avventure di Pinocchio"*, di Carlo Collodi, 1883, in *L'Indice Penale*, 1999-n.2, p.947

M.Marchesiello, *In principio era il legno: Pinocchio e l'immagine della legge*, De Ferrari (Genova), 2002

M.Ripoli, *Pinocchio e l'obbligo scolastico*, in *Materiali per una storia della cultura giuridica*, 2000-n.2

P.アザール(矢崎源九郎・横山正矢訳)『本・子ども・大人』紀伊國屋書店、1964年

C.ベッカリーア(小谷真男訳)『犯罪と刑罰』東京大学出版会、2011年

尾河直哉「ピノッキオの鼻はなぜ伸びるのか?—「ピノッキオのぼうけん」を読む(1)—」『流通経済大学流通情報学部紀要』14(1)、2009年

小谷真男「未完のプロジェクトとしての(イタリア法)—統一刑法典編纂過程の分析から—」北村暁夫・小谷真男編『イタリア国民国家の形成—自由主義期の国家と社会—』日本経済評論社、2010年

藤澤房俊「ピノッキオとは誰でしょうか!」太陽出版、2003年

前之園幸一郎「ピノッキオの人間学: イタリア近代教育史序説」青山学院女子短期大学学芸懇話会、1987年

前之園幸一郎「ピノッキオの冒険」とキリスト教的文化の伝統」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』9、2001年

www.compagniadellafortezza.org/indexstatic.htm

(受刑者劇団 Compagnia della Fortezza ウェブサイト)